

「記憶」を「記録」する：あるシベリア抑留経験者の オーラル・ヒストリー（1）

——出生から徴兵まで——

富樫 耕介*

はじめに

シベリア抑留は、日本人であれば、一度は聞いたことがある重要な歴史的出来事であり、北方領土問題と並び日本社会の対露認識において少なからぬ役割を持っている。これまでシベリア抑留については本格的な研究が少ない一方、ジャーナリストによる著作に加え、当事者が回想録などの記録を残し、これを公刊することに精力的に取り組んできた。私家版を含む膨大な回想録と少なくないジャーナリストの刊行物、そしてごく僅かな研究というアンバランスな構成が長いこと続いていた。

しかし近年、学術研究も活性化しつつある。例えば、ロシア史を専門とする富田（2013, 2016）が盛んに研究成果を出している。富田は、シベリア抑留を単なる「日本人に対するソ連の抑留」として捉えるのではなく、ドイツ人に対する抑留も比較対象に加え、これまで十分に注目されて来なかったシベリア以外の抑留地、さらには帰国後の抑留経験者の状況なども研究に含めている。また小林（2018）は、シベリア抑留を日ロ関係の問題としてだけでなく、冷戦構造の観点から問い直し、米国側の視点（米国側公文書）も加えた研究成果を出した¹⁾。

このように学術研究の活性化の兆しが遅ればせながら見られる一方で、当事者は次々と鬼籍に入り、今後の研究や後世への教訓としてシベリア抑留の「記憶」をいかに「記録」していくのかという問題が生じている。特に、これまで自ら対外的に情報発信をして来なかった抑留経験者の歴史や経験をいかに後世に引き継ぐのかは大きな課題である。このような問題意識から、抑留経験者の子や孫が自らの父や祖父の歴史を振り返る試みも行われてきた（おざわ 2011, 久保田 2015）。研究者自身によって行われた同様の試みとして、社会学者の小熊英二による著作（小熊 2015）が有名である。

筆者は、小熊のようにシベリア抑留経験者の親族（祖父）を持つ研究者である。しかも、筆者はロシア・旧ソ連地域を専門としており、いずれは祖父の経験と向き合い、シベリア抑留問題についても研究する必要があるだろうと考えてきた。しかし、祖父は自らの経験についてこ

受理日2018年11月28日

*教養学部国際学科講師

れまで多くを語って来なかったことに加え、筆者も学部から国際関係や紛争研究を専門としてきたため、ロシア史など歴史学に関心が薄く、シベリア抑留についても深く学ぼうとして来なかった。博士課程でロシア現代史を専門とする教員の指導を受けるに連れて²⁾、ロシア史にも関心を寄せ、祖父がシベリア抑留経験者である自分がロシアを研究することには何らかの意味があるのではと考えたりもした。しかし、筆者が実行に移したことといえば、ハバロフスクとビロビジャン（ユダヤ人自治州）に祖父を連れていき、共に戦友の墓参りをしたことだけだった。

昨今の若手研究者を取り巻く厳しい環境の中では、まずもって博士論文を完成させること、その後は、研究職を得ることを最優先にせざるを得ない。そのような中で、あえて専門ではないシベリア抑留を研究することは筆者にはできず、ずっと後回しにしていた。最近になって職を得て、時間を見つけては、シベリア抑留に関する邦語書籍を読む中で、筆者はむしろシベリア抑留を研究することは容易ならざるものであると改めて感じるようになった。

第一に、シベリア抑留を研究するためには、ソ連史・ロシア史、そして日本政治史や国際政治史に関する知識が欠かせない。このような専門的知識を形成するためには、多数の書籍や先行研究を読み理解することが求められる。つまり、筆者のように歴史学を専門としない門外漢がシベリア抑留に取り組もうとすると、その準備段階で多くの作業が要求されることになるのである。

第二に、シベリア抑留については、すでに膨大な量の抑留経験者による出版物がある。自らの祖父の経験が一般的なものか、それとも特異なものなのか、あるいは、そこから何か新しい発見はあったのかなどを考察するためには、本来であれば、これらの回想録に可能な限り目を通す必要があるが、これには多くの時間と労力が必要になる。

第三に、上記作業を行った上で、シベリア抑留を研究するためには、ロシア側のシベリア抑留研究に加え、比較対象として他の抑留事例を含む抑留史研究を調査すると同時に、公文書などを通じた史料裏付けをとる必要がある。このような作業、特に国際関係や紛争研究を専門とする者には馴染みのない公文書館での資料調査となると、とても片手間にできるものではない。

研究者が特定のテーマについて論じる以上、ある程度、基本的な理解や研究動向を把握した上で取り組みたいと思う半面、先の見えない作業を丁寧に行っている間に祖父が鬼籍に入ってしまったのは、そもそも研究の意味（個人的な動機）が失われてしまう。そうした中で、筆者が共感したのが、小熊ら当事者の親族による「記憶」を「記録」する試みであった。シベリア抑留を第三者として客観的に研究することは現在の筆者には無理だが、小熊のように当事者（祖父）の経験を一つの素材として提供することは可能ではないかと考えるようになった³⁾。

小熊の著作は、類書と大きく異なる点がある（小熊 2015, pp. 379-380）。第一に、多くのシベリア抑留経験者を取り扱った書籍がシベリア抑留体験を主軸に論じるのに対して、小熊は自らの父の人生全体を振り返る中でシベリア抑留も取り上げるという構成にしている。当然、シベリア抑留経験者として扱われる人々には、それ以前と以後の人生もあるわけだが、どうしても「抑留経験」というレンズを通して観察されがちになる。小熊はこれを、あくまでもその人

物の人生の一部分における経験として示すことで、読者が当事者から観察するシベリア抑留経験を相対化させている。これによって、抑留経験が当該人物の人生にどのような影響を与えたのかについて多様な解釈を可能にする素材を提供している。

第二に、小熊は、いわば小熊家の家族史（ファミリー・ヒストリー）を大正・昭和史の一部として示そうと試みている。同時代を生きる無数の個々人によって、その時代の歴史が構成されている限りにおいて、個々人の歴史を見ることで、同時代史を学ぶことも不可能ではない。小熊は、父親のオーラル・ヒストリーを紹介しつつ、そこで言及される個々の事実確認や裏付けをとり、時代背景の解説や当時の経済・政策・法制などの説明を加えることによって、これを試みている。小熊（2015, p. 379）はこれを社会科学的な観点の導入と述べている。

他方で小熊の著作を読んで、筆者は違和感も感じた。一つは、筆者が同時並行的にスタートさせていた祖父のオーラル・ヒストリーで聞く経験（境遇）と小熊の父の経験（境遇）があまりにも違うように感じたからである。小熊の分析対象である父・小熊謙二は都市下層の事業者であるとされる。それに対して、筆者の祖父・本山新一は農村下層の百姓の出自を持つ。同時代を生きた個々人の歴史が全体の一部であるとするならば、そのような異なった経験を多数持ち寄り共有する作業を進めることが一層重要だと思われる。

特に小熊が述べるように記録が多く残りがちなのが、高学歴中階層であることを考えると、このような作業は一層重要性を帯びると考える。すなわち、回想録などの「記録」を自ら残す者の「記憶」が一般化されやすい現状の中で、これまで十分に「記録」が残されてこなかった者の「記憶」を残すことは、異なった社会階層に位置する一人一人が同じ時代の波に翻弄されたという事実を理解する上で欠かせないのである⁴⁾。

以上のような問題意識から、本稿は、祖父のシベリア抑留の「記憶」を今後の研究や後世への教訓として生かしてもらうために「記録」することを目的としている⁵⁾。その際に、小熊が行ったようにシベリア抑留だけではなく、それ以前と以後の経験を踏まえることで、抑留経験が一人の人間にいかなる影響を与えたのかを考察する。

なお本調査は、祖父は勿論のこと、筆者の伯母の協力を受けて実施された。一人暮らしの祖父を頻繁に訪ねる伯母にICレコーダーを渡し、祖父の人生を振り返ってもらいながら、適宜伯母が質問をする形式で録音がなされた⁶⁾。2018年5月2日から6月6日まで合計4回（1回あたり1時間程度）、録音が行われた。その後、筆者がテープ起こしを行い、原稿化を進める形で祖父を訪ね、再質問を行った。また限られた時間と筆者が手元で確認できる極僅かな範囲での解説等を加えて原稿とした。

なお、1回の録音内容のテープ起こしと、裏付けや確認作業、再質問に時間を要し、原稿の分量も多くなったため、本稿は複数回に分けて掲載することとする。初回は、祖父の出生から徴兵までを扱う。

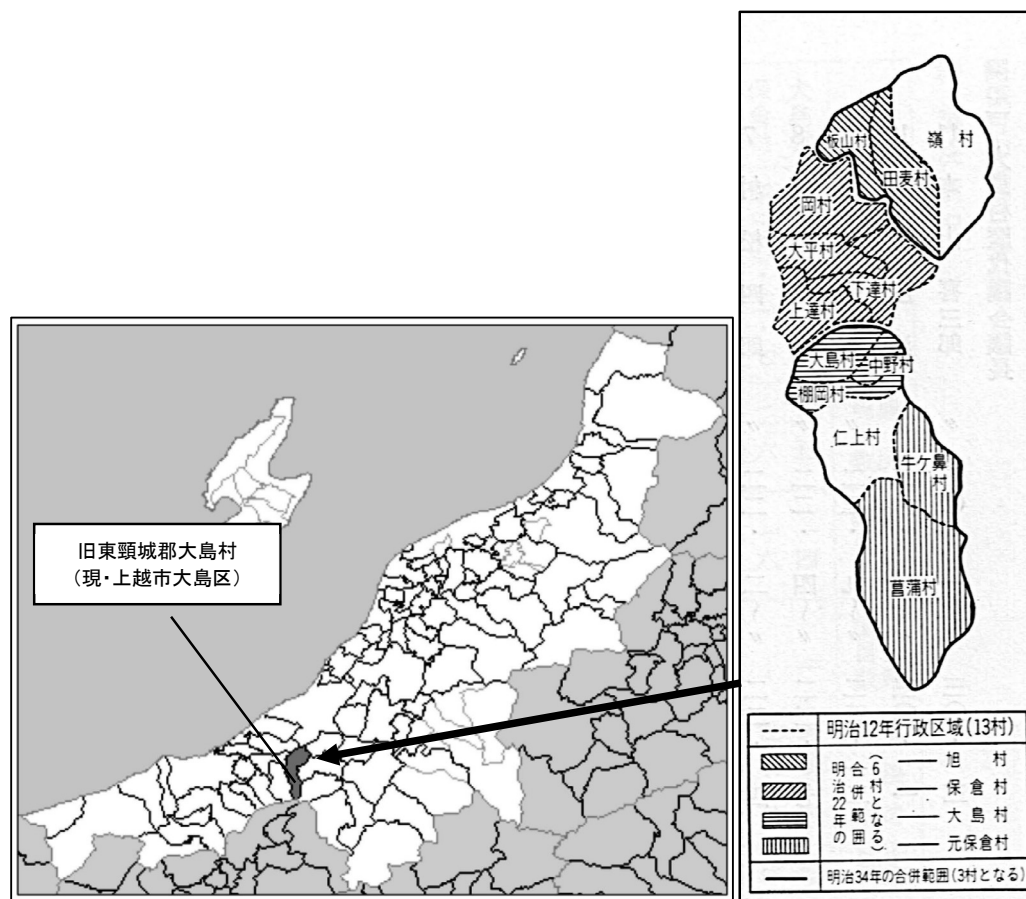
1. 出生から幼年期の思い出

本山新一は、新潟県旧東頸城郡大島村（現在の上越市大島区：地図1参照）に大正10年

(1921年) 4月7日、父・健次郎、母・サトの五男として誕生した。大島村は、四方を山に囲まれた土地であり、後に特別豪雪地帯⁷⁾に指定されるように、冬は村全体が雪に覆われる場所であった。

新一の生まれた家は、大島村の牛ヶ鼻(地図1参照)⁸⁾にある新宅と呼ばれる家だった。この家は、健次郎の父、定蔵が明治15年(1882年)に本山久治郎の養子となり、久治郎の次女ケイと結婚、分家してもらった家であった。ケイは、当時「かたわ」と呼ばれた障害者であり、定蔵とケイには子どもが産まれなかった。そこで明治29年(1896年)、親戚の子である健次郎が養子に入り、翌30年にサトと結婚、新宅の2代目戸主となった。定蔵が分家してもらった当初は、家(図1参照)だけではなく田んぼも分け与えられた。しかし、定蔵は眼病を抱えており、この治療のために田んぼを担保に入れ、借金で取り上げられてしまった。こうして健次郎が戸主になった際には、水田は地主から借りて稲作をやる状態であったという。

健次郎とサト夫婦は六男六女の子どもを授かったが、新一は下から二番目の子どもだった。



地図1 旧東頸城郡大島村牛ヶ鼻

出典：旧大島村の所在地(左)は wikipedia より、旧大島村の明治12・22・34年の行政区域(右)は大島村教育委員会(1991, p. 508)より。

新一の後に大正13年（1924年）9月に末っ子の重利が生まれるが、翌年2月には流行病の百日咳で死んだ。新一は、当時を振り返り、「どこの家も大人数が8人から10人が普通だった。栄養が足りないで弱い赤ん坊は次々と死んだ。強い子しか育たなかった」と述べる。実際に、新宅では、三女のナミ、四男の新治、四女のトワはいずれも幼くして亡くなっている。

大正9年（1920年）の国勢調査によれば、当時大島村には585世帯（3156人）が住んでいた⁹⁾。当時の1世帯あたりの平均人員は日本全国で見ても4.9人と多かったが、大島村はこれを上回る5.4人だった。新一の家は、さらにこれを上回る10人家族であった（但し、このうち次男の栄次郎は婿養子に出している）。このため、長男の定吉と末っ子の新一の間にはふた回りの歳の差があった。

新一は、多感で積極的、いたずらの絶えないわんぱく坊主だった。5歳くらいの時には、目覚まし時計が鳴るのが不思議で時計の中が見たいと思い金鋸で割って分解したという。当然、壊れた時計を新一は直せるはずもなかったが、親に怒られると思い、仏間の外の崖下へ投げ捨てたという。その後、目覚まし時計がなくなると大騒ぎになり、新一の犯行だとわかると散々怒られたという。また6年生の時には、稲刈り前の水田に春先に放しておいた鯉（稚魚）が大きくなっていたのを新一が捕らえようと稲を踏み倒して追いかけた。収穫前の稲を踏み倒しているのを見て、兄の定吉は怒り、新一を追いかけて回したが、新一が家に帰っても誰にも怒られなかったという。

以上のような新一のいたずらは多数あるが、新一は健次郎や年の離れた兄たちに殴られた記

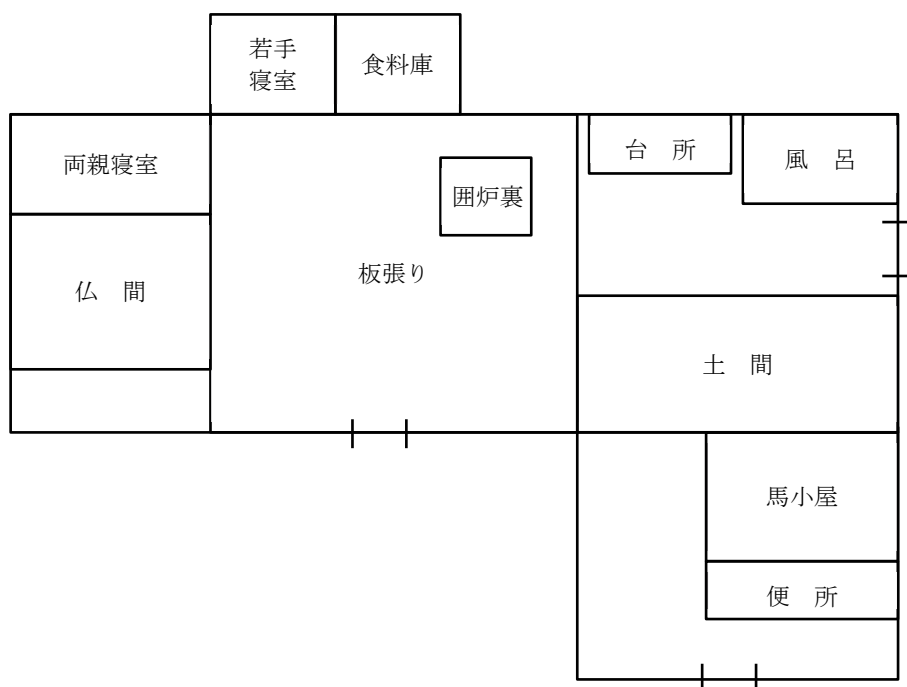


図1 新宅の間取り
出典：祖父の作図に基づき筆者作成

憶はないという。新一は、「近所で折檻しているのを見ると、あんなに小さいのに手を挙げなくてもいいのにと思っていた」と述べる。当時、しかも農村部の百姓では、子どもへの体罰や折檻は当たり前だった。そうしたこともあり、新一は健次郎の女・子どもに手を挙げないという教育方針が強く記憶に残っているようである。

健次郎とサトは、村民の信頼も厚く、好人物だったという。新一は、父・健次郎について「酒好きで子煩悩だった」と述べる。健次郎が一杯飲みに入ると、子どもたちは店の外で父親の出てくるのを待った思い出があるという。「トッサァ」と言い腰にまとわりつくと、酒の匂いをプンプン漂わせた健次郎は、後ろめたさもあってか小銭を握らせてくれたという。しかし、新一は、健次郎について「普段はお金がないからほとんど飲めない。友人と飲みに行くなんてこともない。本家に年貢を納めに行く時くらいしか実際には飲むことができなかった」とも述べる。サトは、小柄ながら芯のしっかりした人で、体も丈夫だったという。そして人が集まるようなところに行けば、その中心でよく踊り出すような明るく陽気な人だった。

健次郎とサトは、教育にも熱心で、「赤貧洗うが如し」と新一が形容するような中で、三男の兼治、次女のミネ、五女のキワ、六女のみヨシ、新一を尋常小学校卒業後、高等小学校まで上げて勉強をさせた。近所の子どもの中には尋常小学校までだけの者もあり、羨まれたと新一は述べる。新一によれば、百姓は当時、子どもを労働力と考えていたため、尋常小学校に行っていた者も6年の最後まで終えずに4年程度しか行かない者が多かったという。そういった中で、4人の子どもを高等小学校に行かせた点は特筆できるだろう（但し新一以外は高等小学校を1年で終えた）。

しかし、健次郎が病に倒れると生活は一層厳しくなった。新一の家は、既述のように初代戸主の定蔵が借金のカタで水田をとられたため、健次郎の代には小作農となっていた。このため、年貢米を地主に納める必要があった¹⁰⁾。しかし、地主に支払うと手許にはわずかしかなかった。それは家族の半年分の食糧に満たなかった。新一は、初雪の積もる頃に小学校の前の道路を地主に納める年貢米を馬の背に乗せて運ぶ小作人の行列ができたことを記憶しているが、その中には父・健次郎の姿もあった。

1930年から始まる昭和農業恐慌では、冷害も重なり、大凶作となり、農村地域では飢餓や娘の身売り、さらには青田売りなども行われた。新一は、昭和10年（1935年）に全国的に冷害の広がりや稲作が壊滅的な打撃を受けたことを記憶している。ちょうどこの頃には、長男の定吉は出稼ぎへ出ており、定吉の妻イシは妊娠、働き手は不足していた。このような中で健次郎が病に伏し、冷害の影響は新一の家族に重くのしかかった。政府は、緊急の飢餓対策の食糧輸入を行い、大島村の各部落にも配給があったが、それを新一とサトが受け取りに行ったという。

新一が高等小学校2年時に父・健次郎の病気が進行し、寝たきりの病人となった。食事や喉を通らずに日に日に衰弱していった。まだ雪の多い春先に次女ミネの夫・憲太郎が健次郎を背負い医者へ診せに行った。胃癌の宣告を受け、妻のサトは涙と鼻水を袖で拭き、次女ミネは肩を震わせて泣いたが、新一はいまいちピンとこなかったという。こうして5月4日に健次郎は65歳でその生涯を終えた。父の死から1、2週間後には新一は、小僧奉公のため台湾へ旅立つこととなる。

2. 台湾での出稼ぎ奉公への旅順

新一は、8つ上がりで尋常小学校に入学し、2年間の高等小学校を経て、15才で卒業した。卒業する年の春になると、新一の住む大島村牛ヶ鼻にも小僧奉公を探す口利きがやってきた。新一にも東京の木場の材木問屋、千葉の造り酒屋などから声がかかったという。しかし、新一は、台湾にある呉服屋の小僧という話に強く惹きつけられた。新一は、台湾に関心を持った理由を以下のように答える。

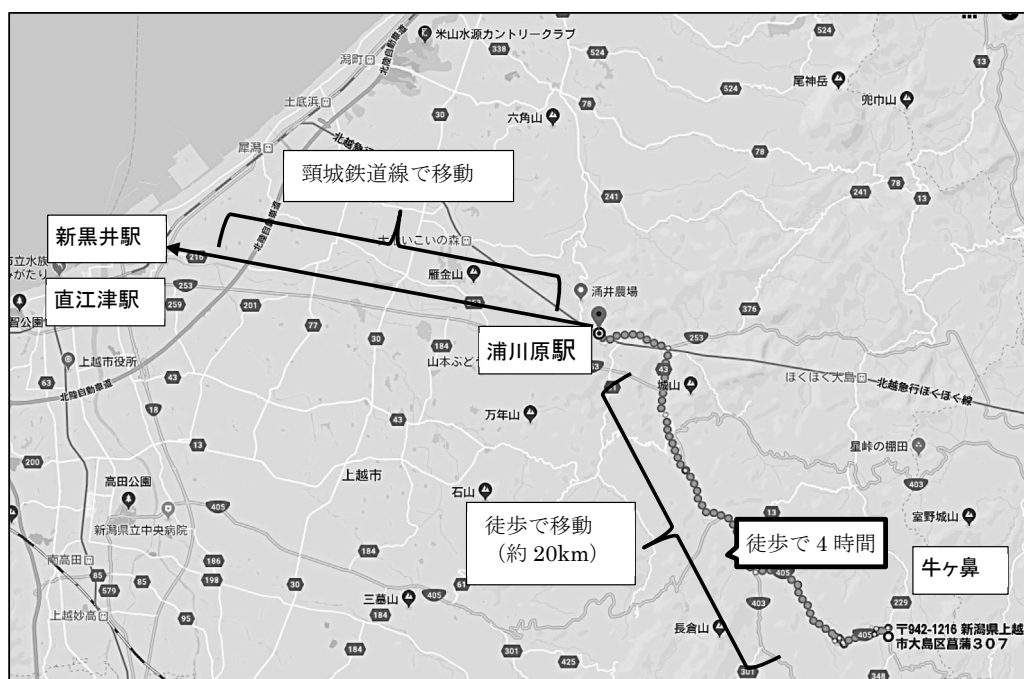
「日本の領土だったため、小学校の地理で台湾について習うから、沖縄の南に位置し、温暖な気候だと知っていた。自分たちの故郷では雪が2、3メートルも積もるわけだが、台湾は温暖な気候だと言うし、行ったこともないし、行って見たいと思うようになった。」

牛ヶ鼻からは、新一の姉キワの同級生3人ほどが台湾に行き、その翌年にもまた2、3人行っていた。新一によれば、「そういった子どもたちが便りをよこして、店から今年は何名欲しいなどという話が届く。その依頼に基づいて口利きが何人か探すという手筈になっていた」という。新一に來た話は、滋賀県彦根市の日夏村から台湾に店舗を出している日夏呉服店経由の話だった。新一は、「村で口利きをしている親父の息子も2人くらい、他にも2人くらい日夏呉服店に働きに出ていて、村から4人行っているのだからどうだ、となった」と述べる。

新一は、常夏の台湾と夢を膨らませて台湾行きを希望したと述べるが、定吉夫婦は反対したという。当時、健次郎を亡くし、サトも高齢で、定吉の妻は出産を控えており、新一は定吉にとって欠かせない労働力であった。定吉自身も秋に米の収穫が終わった後、出稼ぎに出ていたが、新一も同様にすれば、夏場は百姓として働ける。このように雪国の農村では、昔から冬季出稼ぎが行われており、収入の低い百姓において貧しい生活の中で出稼ぎは生活維持のための大切な収入源とされていた¹¹⁾。

定吉がそうであったように当時、新潟県全体でも出稼ぎの多くは、関東地方の酒造業者に行く者が最も多かった¹²⁾。これは酒造期が冬季出稼ぎと重なっていたためである。新一にも酒造りの小僧奉公の声はかかったが、新一自身は、百姓との兼業ではなく将来的に何らかの技術や技能が身につく仕事をしたいと子供心に考えていた。そのため、定吉のように造り酒屋で働くことはあまり考えていなかったという。夫・健次郎を失い、末っ子の新一まで台湾へ行くとなれば、母・サトは内心反対ではなかったかと事後的に新一は推測する。ただ、サトは諦めもあったのか、あるいは家の犠牲になる必要はないと思ったのか、台湾行きに反対しなかったという。

小僧奉公の口利きは、勧誘する小僧たちに出稼ぎ先での仕事内容や生活の様子を語ることはあっても、給与や条件の話はしないことが多かった。新一も待遇面での説明を受けた記憶はないというが、東京での小僧奉公はだいたい月5円と決まっていた。それに対して台湾の奉公は遠くから呼び寄せるため、人を集めるのに苦勞することもあり、月8円と待遇も良く、前借りも認めることが多かった¹³⁾。新一の場合も最終的に定吉夫婦が納得したのは、前借りを3ヶ月分入れることが認められたからだろうと新一は述べる。前借りした20円超があれば、新一が不



地図2 大島村牛ヶ鼻から直江津駅までの経路

出典：google map を用いて筆者作成。

在の間、繁忙期に百姓を日雇いすることもできるからである。

新潟から台湾への長い旅順は、徒歩から始まった。新一が住んでいる大島村牛ヶ鼻の最寄り駅である安塚村浦川原駅までは、約20kmを4時間歩いて行く必要があった。新一は、当時について「出発が5月だと思うが、その時は、今と違って雪がよく降って3、4メートルなんてことが頻繁にあった。まだ雪が田んぼを覆っていた。その雪の中をお寺の方に向かって歩いて出て行った」と述べる。

新一によれば、日夏呉服店を口利きした人物が川を隔てた西部落に住んでおり、早朝にそこに行き、当該人物と一緒に、山を越えて船倉まで下り、安塚¹⁴⁾まで出たという。その後、浦川原駅に出て、同駅で軽便鉄道に乗車し、直江津まで行ったとのことである。新一が述べる軽便鉄道とは、1900年ごろから1930年ごろまでに日本各地に作られた低規格の鉄道である。レールや車両が小さく、輸送能力が乏しく、速度も遅かったが、浦川原駅を始発（あるいは終点）とするのは、頸城鉄道線で新黒井駅までを結んでいた。新一が直江津駅まで辿ったルートを現在の地図に示したものが、「地図2」である¹⁵⁾。

新黒井駅から直江津駅まで出ると、その後は日本海を夜汽車で滋賀県の彦根まで行くと新一は述べる。「彦根までは、日夏呉服店への口利きをしてくれた親父さんが連れて行ってくれた。この親父さんは、台湾から戻ってきていた日夏呉服店の旦那に俺らを引き渡すと帰った。その後は、日夏呉服店の親父さんが彦根から神戸まで連れて行き、神戸から台湾の基隆市に向かった」。牛ヶ鼻から出て台湾までの移動は、少なくとも鉄道で1日、船で4日間程度はかか

っただろうと新一は回想する。

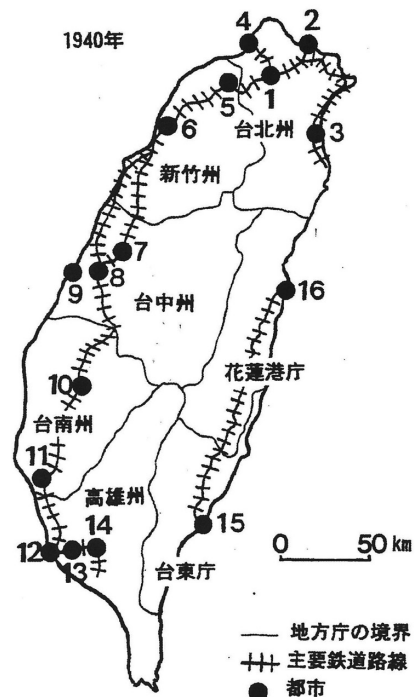
豪雪地帯で生活をしており、まだ雪が残っていた牛ヶ鼻から出た新一は、出発の際に冬仕度（綿入れにゴム靴）だった。こんな格好で台湾まで向かって行ったから、日に日に暑くなってしまった。「神戸あたりに着いたら、もう暖かなくて綿入れを脱いだ。船の中も室温調整があって暖かったし、甲板に出ても瀬戸内海で暑かったので、下着1枚になっていた。寒いことしか考えていなかった」。その後、九州から朝鮮半島の玄界灘を出て、沖縄を経て台湾に向かった。

台湾の基隆港（地図3の2参照）に上陸すると、新一は大変驚いたという。現地の人はシャツ1枚の軽装や上半身裸で裸足の人も多かったからである。人生で初めて人力車と一緒に乗せてもらい感動した新一だが、車夫も上半裸に被り笠、裸足だったという。それを見て、「これは働いている人は大変だな。うち（牛ヶ鼻）の方でも靴は履いていたのに、こっちでは（台湾の現地住民は）履いていない人が多い。まさか呉服屋っていうのだから裸で仕事するってことは無いのだろう」と思ったという。

基隆からは、宜蘭線¹⁶⁾で宜蘭（地図3の3参照）に向かった。新一によれば、「宜蘭線は基隆から汽車で3、4時間くらい終点まで走っていくが、その頃の汽車だから遅かった。何時頃着いたのかは覚えていないが、宜蘭駅に着いてからは、人力車に再び乗った。」という。街は、日が暮れ電気がついており、周りには水田もあり、山も見えたとのことだった。

呉服屋に到着したら、新潟の田舎から雪焼けた小僧が来たと歓迎してくれたという。新一が着いた呉服店は、日夏呉服店が紹介してくれた田中呉服店であった。「一緒に連れ来てくれた日夏呉服店の旦那は、花蓮市にある自分の店に帰った。到着したら、道中冬支度の衣類を脱いで襦袢を着ていたものだから、それじゃあということで、おかみさんが開襟シャツと白いズボンを出して、これを着なさいと出してくれた。俺はゴム靴を履いていたが、下駄もくれた。」

新潟の雪深い村落から冬仕度の格好で5日程度かけて温暖な台湾に到着した新一は、開襟シャツと白いズボンという格好（写真1参照）になって新しい生活を始めることになったのである。



- 1.台北 2.基隆 3.宜蘭 4.淡水 5.桃園 6.新竹 7.台中 8.彰化 9.鹿港 10.嘉義 11.台南 12.高雄 13.鳳山 14.屏東 15.台東 16.花蓮港

地図3 植民地時代台湾地図

出典：北田（2004，p.3）第1図より。

3. 出稼ぎ奉公先での仕事

新一は、「宜蘭という街は、守備隊を含む日本人3000人ほどを入れて人口が3万人程度の小さな街だった。地方都市だから、独立守備隊は250人の1個中隊がいたし、官公庁もあったが、大企業なんてなかった。」と述べる。新一が滞在したのは1936～37年頃だか、1940年の『台湾総督府統計』（北田 2004, p. 8）によれば、宜蘭市の人口は3万8000人となっており、新一の理解と一致する。

新一が働き始めた田中呉服店には、新一たちが行く前に小僧が3人、番頭が3人、番頭見習いが1人いた。呉服店は、裏には独立守備隊駐屯地、表はメイン通りに位置する煉瓦造りの2階建てで、1階部分が店舗と従業員用居住スペース、2階部分が呉服店を経営する家族の居住スペースと物置という作りになっていた（図2参照）。新一によれば、「店の裏には守備隊の基地があるため、朝晩には起床・消灯ラッパがなった」という。また、「店の前はメイン通りだったから、バスなんかも走っていた。タクシー会社も2軒ほどあって、それ以外は人力車だった。（お客さんのために）電話をすれば、直ぐに人力車はやってきた。」と述べる。

呉服店で販売する衣類について、新一は「温暖な気候だったため、絹¹⁷⁾や紗¹⁸⁾、羽二重¹⁹⁾なんて高級品などは使わず、売るものは木綿や紬の普段着だった。ブラウスの広がったような1枚だけのを紐で結んだもので、俺らはそれを「あっぱっぱ」と言った。それに現地の人は裸足で、日本人は裸足というわけにはいかないからサンダルを履いていた。」という。しかし、新一のような新米の小僧は当然、お得意先もなく販売はできないので、最初は掃除や片付けが

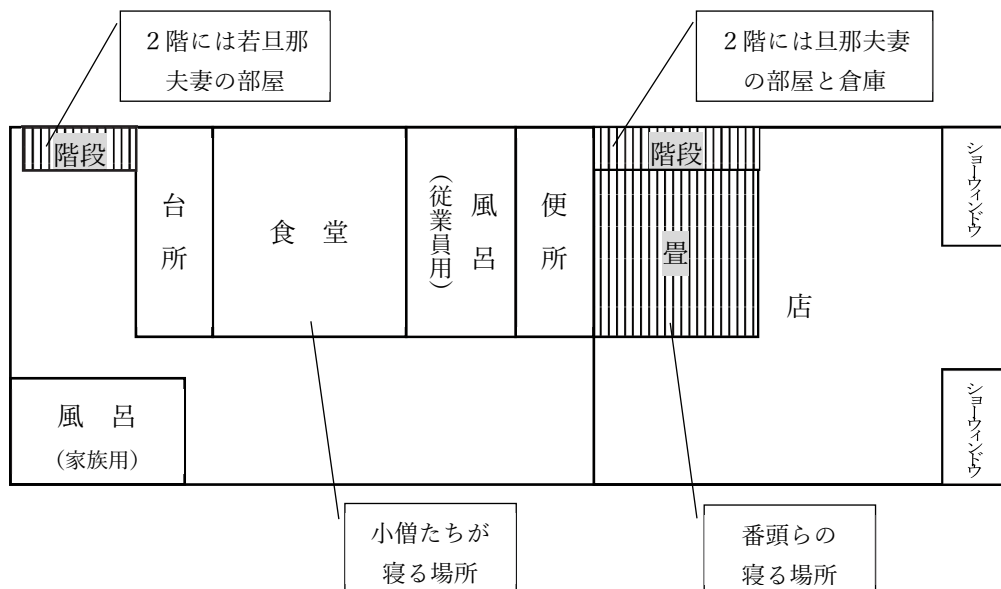


図2 田中呉服店の間取り
出典：祖父の作図に基づき筆者作成

仕事だった。

呉服店では、日本の食事が提供されたという。呉服店には、現地台湾の40歳くらいの女中さんが通いで働いていたという。お店の奥さんが「今日はこれを買ってきなさい」と言うと市場に女中さんが買い物に向かっていたと新一は述べる。呉服店には、冷蔵庫もあった。朝に大きな氷を持ってきて、それを冷蔵庫に入れていた。石炭で火をつけておいたカマドは持ちが良く、「いつでも湯が沸いているような状態」と新一は形容する。「食事は、最初にお店のご主人と家族が、その後、番頭さんたちが4人くらいで食べて、最後に俺たち小僧が5人くらいという順序だった。」

食事は、すべて女中さんが作ったという。女中さんは、日本語もそれなりに話し、新一ら小僧の食事時間になると「ご飯だよ」と日本語で伝えてくれたという。

食事について新一は、「牛ヶ鼻にいた時とは随分変わった。牛ヶ鼻にいるときは死なない程度に食べていただけだったが、台湾では三食白米におかずもあった。」と述べる。牛ヶ鼻では大根を刻み米粒が見えないほど覆い尽くした「大根飯」などを食べていたのに、それまで食べたことの無い肉や魚を食べさせてもらったようである。こうしたこともあってか、新一は台湾での生活で寂しいとは思わなかったという。

小僧奉公では給与は振込制で、直接小僧には渡されないことが多かった。手元にあれば、どうしても使ってしまうからである。新一への支払いも台湾銀行の口座を通して行われたが、直接手渡しされることはなかった。それでも、お金が必要な時もあるので、その分はお店の女将さんが適宜、金庫から少額を渡し、受け取った小銭を新一は巾着袋に入れていた。新一は、給与日に「お店の大将が『8円入れたよ』と言って、入金した通帳を見せてくれた。その際に『お前のところは前借りがあるから、5円は持っていくよ』などときちんと説明してくれた。」と述べる。新一は、「筋がしっかり通っていたから俺も納得した」という。

呉服店の仕事は、年中無休で休みが正月を除いてほとんどなかった。年末も給与を受け取った人々が買いに来るため、31日の夜中12時まで店を開けていたという。正月のために呉服店の奥さんと女中が料理の準備をし、新一ら小僧も2階のご主人の住まいになっている部屋に机を運び、宴会の準備を手伝った記憶があるという。この時は皆で揃って食事をしたという。

新一は、当時を思い起こし、「休みは、本当にこの正月しかなかった」と述べる。「もっとも、休みがあっても行くとこもなかった」と言う。当時、宜蘭には「宜蘭座」という映画館があった（写真2参照）。新一によれば、映画は1ヶ月で3回くらいしか変わらず、「10日間同じものを流して、10日間経つと別のものを流す」というサイクルだったようである。フィルムは台北あたりから来て、10日間で各地を巡回していた。映画館のフィルムが変わるとチンドン屋が映画の宣伝に出るが、新一は立番しながらチンドン屋を見ていたら、店の奥から「しっかりそ

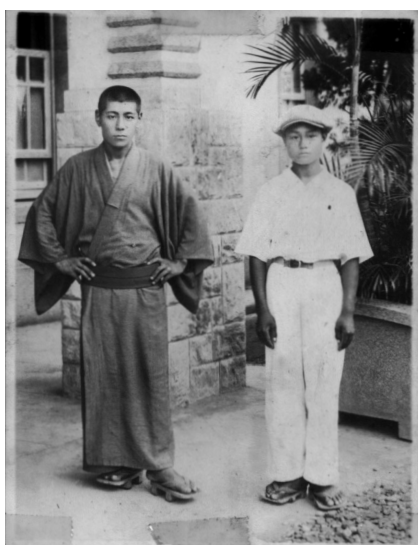


写真1 番頭と新一（当時15才）

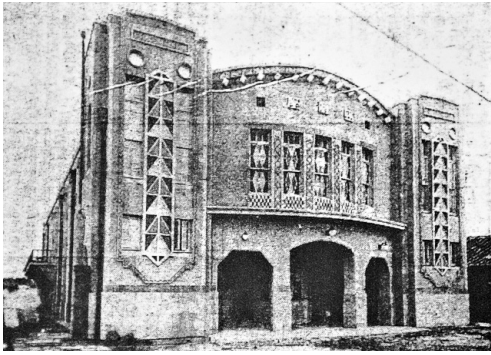


写真2 新一が通った宜蘭座（映画館）

出典：The Taiwan History Learning Resources Platform ウェブサイトより (<https://the.nmth.gov.tw/nmth/en-US/Item/Detail/0ebbd67-f7dd-498b-b232-2021f89bf2b4>)

こ掃除をしろよ!」と怒鳴られたという。

呉服屋では小僧から見習いになるのは、1年ほどかかり、見習いになると自転車に箱を縛り付けて店の外へ物売りに出る。新一は、自転車など田舎にはなかったので当然乗れない。そういった小僧も少なくないので、1年先に入った先輩が、自転車の乗り方を宜蘭公園で教えたという。覚えたら自転車に箱を載せて売りに出るという手筈である。しかし、新一によれば、「番頭の縄張りがあって、見習いが行くところがない」。毎年春には官庁や会社の異動があるので、その代わり目に一生懸命、先輩番頭の

ところに食い込もうとする。ところが、見習いは大した知識もない上に先輩が睨んでいて、役付きの邸宅には先に手を回しているという。「見習いの俺たちが言っても、挨拶くらいしかできない。半年くらい回ってもウダツが上がらないってわけだ。」

当然、新一と同じような先輩の見習いがいて、彼らが時間の潰し方を教えてくれたという。彼らは宜蘭座の映画が変わる時期を知っていて、知り合いのいる官舎や社宅に自転車を置かせてもらう。これで営業をしているアリバイ作りをして、宜蘭座に向かって映画を見る。そうして映画を一本見ると、「さあ行くか」と言って、自転車をとって店に戻る。こうして2時間半くらい時間を潰すという。新一は「お得意さんもいるわけではないし、誰も何も買ってくれないのだから仕方がなかった」という。

このような時間潰しを覚えた新一だが、ある事件をきっかけとして、これを改めることになる。当時、新一は、自転車を覚えてからまだ日が浅く、反対側から人や自転車が通ると気にかかってしまっていたという。ある時に現地人がリアカーのようなものを引き前からやって来た。新一は、気になったものの、自転車を降りて待たずに横着して、横を通り過ぎようとした。すると案の定、ぶつかってしまい、自転車ごと転んで載せていた箱がドブに落ちてしまった。よりによって、そういう時に高い大島紬²⁰⁾を入れていたという。全部で120～130円する大島紬を弁償することなど、新一にはできない。急いで持って帰ると、すぐに奥さんが洗い張り²¹⁾を呼んで、丹念に綺麗にするように依頼した。1週間後、奥さんが「洗い張りに出して、こうして綺麗にしたのだから、これからは気をつけなさいよ」と言い、店の主人も責めなかった。こうして新一は、「あの大将の目を盗んで時間潰しなどしてはいけない」と、それまでの態度を改めたという。

4. 出稼ぎ奉公からの帰国～徴兵まで

田中呉服店での生活について、新一は小僧や見習い、番頭の間で陰湿なイジメ等はなかったと述べる。店の主人も悪い噂が出ると小僧さんがもう来なくなってしまうと考えていたようで、

しっかりと見てくれていたという。しかし、2年いても新一の下に誰も入ってこないのだから、新一は小僧・見習いのままで中僧にはならなかった。それでも新一も周りを見ていて、呉服屋での展望はなかなか難しいと思いつつ至るようになったとのことであった。

「2年目にもなれば、自分でも色々考えるようになる。先輩の番頭さんが2人くらいいるのだから、そういう人たちがどうしているのだろうかと見ていた。店を辞めて一人で営業をやって、品物は問屋から仕入れ売れたら儲け分をもらって売れた元金を支払う委託販売などを行っている。これは担ぎ呉服屋なんて言って、店を張る力なんてない行商だ。これを5年から8年やって、初めて店を持つことができるようになる。それだって、委託販売でも始めるには保証金が必要になってくる。それを貯金した金などで用意してやっている。」



写真3 呉服屋2年目の新一

「奉公なんていうものは、その仕事しか知らないわけだ。だけど、先輩が30才過ぎて自分の自転車を持って売り歩いているのを見ていて、『こんなことをやっても30過ぎであの状態じゃ大変だし、ここの土地は植民地で日本の領土だけど、日本人は宜蘭に3000人程度しか住んでいない。どこか別の街に行くにしても、同じような状態なのだから、これではこの商売は駄目だな』と考えた。」

新一がこのように2年目には呉服屋に見切りを付けたのは、新一に一定の観察力があつたことも理由だろう。新一は、台湾に来るまで新潟の牛ヶ鼻の外にほとんど出たことのない少年である。それにもかかわらず、宜蘭について「地方都市で役所等々が8割であり、大企業もなく、活気も華やかさも特に感じなかった。台湾に到着した際に立ち寄った基隆などとは大きく違っていた」と述べていることは注目に値する。これは、かつて宜蘭にあった地方庁の所在地としての地位が失われ、官署の立地数も低減傾向にあったという当時の状況（北田 2004, p. 12）を的確に捉えている。

新一は、辞めようと思ったが、大将（店の主人）は、なかなか首を縦に振らなかったという。新一は、「それだって、大将の方もお金にならない小僧を養って食事も与えているのだから、せいぜいそれが稼ぐようになるのに5、6年かかるわけだけど、そうやって1人前にならないと小僧を育てた甲斐がないわけだ。」と述べる。

「そういった状況だから、実家から手紙でもよこしてもらい『婆さんが体弱ったから帰してくれ』というような泣き言を書いてもらわないと駄目だと思って、手紙を書いてくれと送った。新宅でも心得ているから手紙を書いてくれた。牛ヶ鼻からは2人行っているのだから、1人だけ帰ると、もう1人が残ってしまう。じゃあ、2人で帰ろうかなということになった。そうなれば、大将の方も何人も使っているから、『こいつはもう駄目だな』ということが分かるので、『そうかそうか』と言って引き止めもせず帰してくれた。」

新一は、田中呉服店で2年間働き、小遣いを少し貰ってあとは貯金していた。前借りした24

円と、諸々かったお金を差し引いても、台湾を離れる際の通帳が100円になっていたという。大将は、それを為替にして新潟県に行ったら現金に替えるように言ったという。新一曰く「当時の100円なんて言ったら大変なものだ。俺の兄の定吉が出稼ぎに出て半年で80円くらいだったのだから、呉服屋の給与は良かった。俺も台湾に行くと言って出て来たのに2年で戻って悪かったと思い、100円を定吉ジサに渡した。家族は『100円も稼いで来たのだから』と喜んでくれた。」

台湾から帰ってきた新一は、秋まで百姓の手伝いをして、皆が出稼ぎに出るときに一緒に東京に出てきた。新一は、台湾（宜蘭）にいた経験はあるが、東京は比較にならないくらい大きく発展しており驚いたという。昭和通りを見て、これほど広い通りがあるのかと思ったそうだ。最初、新一は、三男の兼治のところに身を寄せたという。

「兼治は、シボレーか、フォードのガラクタを乗り回してタクシーの運転手か何か、今で言う白タクのようなことをしていた。だけれども、兼治兄は酒に弱かった。だから、ちょっと稼げばいいと余計に飲む。車も借金のカタにでも取られたのだろう。（兼治は）運送屋の車庫の2階の6畳か、8畳一間かのところで住まわせてもらって、大熊運送というところで働いていた。そこに1週間ばかり泊めてもらった。」

新一は、その後、五女のキワの紹介で東京府東京市下谷区²²⁾ 坂町にある酒井博文堂（印刷所）に勤務することになる。この印刷所は、キワの夫・西村の兄が工場長をしており、その縁で紹介されることとなった。御徒町駅のすぐ側に同社の製本所があり、そこに新一は下宿していた。新一曰く「御徒町の駅に電車が走って来て、ゆっくりスピードを落とすから、2階で裸になってひっくり返っていると電車のお客さんと目が合うようなところ」だった。食事もある住み込みは、印刷所の主人のところで食べさせてもらったという。

新一は、「印刷屋なんて畑違いで訳がわからなかった」と述べるが、兵隊に入るまでの間、充実した日々を過ごしたようである。一つに、新一は、子供の頃から自分で技能を身につけて仕事をしたいと考えていたが、呉服屋のような徒弟制とは違い、印刷業は近代的で技術習得も可能な仕事であったことが良かったのであろう。また酒井博文堂は、その時代にしては開放的で先駆的な会社であったようである。毎週日曜日は休み、仕事も9時から6時の定時と決められており、社員の慰安旅行も行なっていた。さらに、新一は工場長に目をかけられ、そして会社の中心的な戦力として働いた。新一曰く「仕事はたくさんあったが、どんどん戦争の影響で職人が徴用されて行ったので、とにかく人手が足りなかった」。そうした中で、田舎から出てきた住み込みを今度は新一が指導する立場になったのである。

新一は、東京での生活について台湾のような「思い出という思い出はなく、1年中とにかく仕事をしてた」と述べる。そして気がつけば、自分が一番年上になり、小僧たちを教えたという。新一は、貧しい百姓の出身で、15才の時に台湾に出たため、ギャンブルや酒、タバコなど悪いことを知らずに来たという。このような新一が社員の筆頭であったため、下の者が酒やギャンブルに手を出すこともなかったという。新一は、「給与をもらったなら、せいぜい衣類や靴を新しく買うか、娯楽といえば、皆を浅草に引き連れ、映画を見て天井を食べる程度だった。交通費を入れてこれ全部で当時は1円くらいで済んだ」と述べる。

新一は、「そもそも手持ちの現金が大してなかった」とも言う。印刷所の給与も直接渡されるのではなく、口座に入れられていたためである²³⁾。しかも、戦時徴用が進み、毎月の給与の半分は国債と貯金を強制されるようになった。次第にラジオも連日軍艦マーチを流すようになった。こうして宜蘭にいる時は感じなかったような戦争色が徐々に強くなるのを新一も感じ始めたという。

「ガソリンがないから漁船は動かなくなる。市場の活気もなくなり、配給制が始まり、肉や魚が手に入らなくなる。生活が窮屈になってくる。印刷所の社長は町会長をしていたが、町内会で様々な情報や指示を受けて、それを朝礼などで伝えてくれる。店でも新聞をとっているから、夕方に皆が仕事から帰ると、一息ついて新聞を読むなりしていた。そういう風にして、ああ、戦況は悪化しているなあと感じていた。この頃になると、旗を持っ

て派手な招集の送り出しが始まるようになった。最初はこのような送り出しは行なっていなかったが、戦況が悪くなって国がプロパガンダとして、派手な送り出しを始めたように思う。こういう状態だから自分も戦争に駆り出されることはある程度、覚悟をしていた。」

昭和16年（1941年）6月、大島村役場から新一に徴兵身体検査の通知書が届いた。当時の日本では、20歳に達した男子は、一律徴兵検査を受けることが義務付けられており、通知書は4、5月頃に届き、地域の集会所や小学校で検査が行われた。検査に合格した者は翌年の1月10日に各連隊に入営する事となっていた。新一の検査会場は、松代村²⁴⁾ 国民学校であった。朝の5時に牛ヶ鼻に集合して、松代の小学校まで歩いて行ったという。検査の結果、第一乙種合格の判定がなされ、入営先は満州に決まった。

その後、しばらくは牛ヶ鼻にいた新一であったが、酒井博文堂より人手不足のため、戻って欲しいと言われ、再び東京に戻った。そして、役場から1月10日に広島県の宇品に集合しろというハガキを受け取ったという。1月に新一は再び牛ヶ鼻に戻り、役場から必要なものを受け取り、家族との別れを交わす。村人は新一を万歳三唱で送り出し、村外れで母・サトは目一杯の涙を浮かべ口を震わせ新一を見つめたという。新一は、何か言わねばと思いつつも、言葉にならず、「おっかあ…達者でのお…俺も体に気をつけるすけ」と言うのが精一杯であった。年始のため出稼ぎから戻っていた長男の定吉が新一と一緒に直江津駅まで行き、新一の夜行列車での出発を見送った。

【(2) に続く】

注

- 1) なお筆者は現状十分に目を通していないが、他にも長勢（2013）が精力的にシベリア抑留研究に取り組んでおり、富田と共に『シベリア抑留関係資料集成』（富田・長勢 2017）をまとめている。



写真4 印刷所時代の新一(右:19歳)

- 2) 当時、東京大学総合文化研究科国際社会科学専攻国際関係論コースに在籍していた筆者は、同コースで中井和夫先生（ウクライナ研究、旧ソ連の民族問題研究）に指導を受けると同時に、東京大学法学部政治学研究科の塩川伸明先生（ソ連史、比較政治学）のゼミを3年間受講し、塩川先生の指導も受けていた。
- 3) なお、いつかは祖父のオーラル・ヒストリーを記録しなければと考えながらも、一步を踏み出せない筆者に行動力を与えてくれたのは、生田美智子・大阪大学名誉教授の存在があることも付言しておく。同氏は、自らの研究を進める過程で祖父に何度か面談し、話を聞いていたそうである。筆者は生田氏とは残念ながら直接の面識は現状ないが、同氏の精力的な取り組みと比して、孫である筆者が何も行動を起こしていないことに不甲斐ない気持ちがあった。
- 4) なお祖父、本山新一もこれまで全く記録を残していないわけではない。例えば、古希の際（1991年）に『70年の歩み』という小冊子（40ページ）を自ら作成し、親族が親しい友人に配布した。この私家版小冊子のうち「入隊」と「シベリア抑留」は合計で9ページ（全体の1/4弱）記載されている。また自らが経営する印刷会社において『我が家の歴史館』と題して自分史を自費出版する商品企画を立てたが、その際のサンプルとして1996年に『激動の昭和を生き抜いて』という小冊子（同じく40ページ）を作成している。これはライターへの口述内容をまとめたものであり、記載されている情報も前者とやや異なる。
- 5) 従って、本稿はシベリア抑留研究に取り組む先人たちと同じ土俵の上で議論を交わすことを目的にはしておらず、筆者が将来取り組む可能性がある研究のためのノートであり、祖父が鬼籍に入る前に記録を残したいという極めて個人的動機で書かれている。本稿の提示する情報や理解に専門家から各種異論が提起されることも予想されるが、まずこの点を理解してほしい。
- 6) 伯母に録音を依頼したのは、筆者が研究教育業務で祖父の家を訪ね、自ら質問を行うことが困難であったためであるが、耳の遠い祖父と円滑なコミュニケーション方法を知っている伯母のおかげで効率的なオーラル・ヒストリーの聴取ができた。
- 7) 昭和37年（1962年）に制定された「豪雪地帯特別対策法」によって定められた「豪雪地帯のうち、積雪の度が特に高く、かつ、積雪により長期間自動車の交通が途絶する等により住民の生活に著しい支障を生ずる地域」を指す。『豪雪地帯特別措置法』<http://www.mlit.go.jp/common/001029279.pdf>
- 8) 地図1にあるように明治12年の行政区分では牛ヶ鼻村だったが、22年に菖蒲村と合併し、保倉村となる。その後、明治34年に大島村に合併される。
- 9) 『大正9年国勢調査』より。データは政府の統計サイト「e-Stat」より閲覧可能である。<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=normal&toukei=00200521&tstat=000001036875>
- 10) 新一によれば、地主へ支払う田んぼの使用量は4割だったという。
- 11) 戦後（1955年）に大島村と統合される保倉村（地図1参照）では、新一が出稼ぎに出る前年の昭和10年当時、村民の約15%が出稼ぎ労働に従事していたというデータもある（大島村教育委員会 1991, pp. 658-659）。
- 12) 大島村村民の出稼ぎに関する情報は、大島村教育委員会（1991, pp. 656-666）を参照されたい。
- 13) なお大島村から台湾への出稼ぎは大正時代（大正4～6年）には、サトウキビ畑の開墾で季節労働者として向かっているという記録がある。最盛期（大正5年）には387人が向かっていたとされる（大島村教育委員会 1991, p. 661）。
- 14) 現在の新潟県上越市安塚区、当時は新潟県東頸城郡安塚村であり、1955年までは浦川原も含む村だった。
- 15) なお Google map に表示されている徒歩ルートは、読者の参考になるように表示したものであり、厳密ではない（同地図では大島区郵便局を始点としているが、牛ヶ鼻はそこからさらに徒歩で30分程度、山に入ったところにある）。当時と道路状況等や交通ルートも厳密には異なっている

- 可能性があるが、徒歩の距離と時間は新一の口述に基づき、20km、4時間としている。
- 16) 台湾基隆市暖暖区の八堵駅から宜蘭県蘇澳鎮の蘇澳駅に至る鉄道。1917年に日本植民地化で台湾総督府が着工、1919年に開通（24年には全面開通）した。
 - 17) たて糸とよこ糸をからませて透き目を作った絹織物（からみ織りの一種）で、清涼感のある布となる。
 - 18) からみ織りの一種だが、絹と違い二本のたて糸がよこ糸一本ごとにからみ合う形になっている。このため織り目が粗く薄くて軽く透けてみえる。
 - 19) たて・よこ糸によりをかけない生糸を用いて平織りにした絹織物で、柔らかく上品な光沢がある高級品。通常の平織りがたて糸と同じ太さのよこ糸1本で織るのに対し、羽二重はたて糸を細い2本にして織るため、薄くやわらかく軽い布となる。
 - 20) 大島紬とは、鹿児島県南方にある奄美大島の伝統工芸品としてつくられる織物である。手で紡いだ絹糸を泥染めしたものを手織りしたもの。
 - 21) 和服専用の洗いで、まず和服を解いて洗い、糊をつけて、板張りや伸子張り（竹製の串で伸ばすこと）にして幅を整え乾かす方法。
 - 22) 東京都にかつて存在した区で、現在の台東区の西部に位置していた。1947年に浅草区と合併して台東区を形成した。
 - 23) 1941年に徴兵され会社を辞める際に新一は1000円になった貯金を長男の定吉に渡した。定吉は、郵便局に新一名義で口座を作り、その1000円を入れたらしいが、新一はそれを知らなかった。定吉も口座のことを忘れてしまったのか、この口座の存在が判明したのは、今から15年ほど前のことだという。
 - 24) 現在の新潟県十日町の一部を構成し、2005年までは東頸城郡松代町（1941年当時は松代村）だった。

参考文献

- 大島村教育委員会（1991）『大島村史』ぎょうせい
- 小熊英二（2015）『生きて帰ってきた男：ある日本兵の戦争と戦後』岩波新書
- おざわ ゆき（2012）『凍りの掌：シベリア抑留記』小池書院
- 北田晃司（2004）「植民地時代の台湾における都市システムの変容：朝鮮との比較を通して」『人文地理』56（3），pp. 223-242
- 久保田桂子（2017）『記憶の中のシベリア』東洋書店新社
- 小林昭菜（2018）『シベリア抑留：米ソ関係の中での変容』岩波書店
- 富田武（2013）『シベリア抑留者たちの戦後：冷戦下の世論と運動 1945-56年』人文書院
- （2016）『シベリア抑留：スターリン独裁下、「収容所群島」の実像』中公新書
- 富田武，岩田悟（2016）『語り継ぐシベリア抑留—体験者から子と孫の世代へ』群像社
- 富田武，長勢了治（2017）『シベリア抑留関係資料集成』みすず書房
- 長勢了治（2013）『シベリア抑留全史』原書房
- 山本新一（1991）『70年の歩み』プリントハウス山本
- （1998）『激動の昭和を生き抜いて』プリントハウス山本